

2023年12月3日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

イザヤ書 55 : 1～7

ヨハネの黙示録 22 : 16～17

「来てください」

【招詞】 マルコによる福音書 1 : 15

【讃美歌】 25 「父、子、聖霊に」

【詩編交読】 詩編 130 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讃美歌】 231 「久しく待ちにし」

【祈祷】

【聖書】 イザヤ書 55 : 1～7、ヨハネの黙示録 22 : 16～17

【説教】 「来てください」

<二つのアドベント>

今日から教会の暦では、アドベントに入ります。アドベントの期間は、今日からクリスマスが来る日までです。

講壇の横には、クランツが置かれました。クランツには、4本のロウソクが立っています。これから毎週、日曜日の礼拝ごとに、このロウソクに一本ずつ火が灯っていきます。そして、4本すべてのロウソクの火が灯ったら、クリスマスがやって来るのです。

クリスマスは、神の御子イエスさまが、まことの人となって、天から降って来られたことを記念する日です。

アドベントという言葉はラテン語ですが、「向かって、来る」、「到来」という意味があります。日本語では「待降節」。待つ、降る、節、と書きます。降られるのを待つ期間です。イエスさまが、わたしたちの世に到来なさる。イエスさまが天から降られる。

そのご降誕のクリスマスまで、祈りをもって過ごし、わたしたちがクリスマスの恵みを、心から受け取る「備え」をするための期間が、アドベントなのです。

そして、アドベントには、イエスさまのご降誕という、この世への到来を覚える他に、もう一つの到来を覚える意味があります。

それは、将来の、イエスさまの到来を待ち望む、ということです。

わたしたちは、この世にお生まれになり、十字架の救いの御業を成し遂げられ、復活し、今は、天におられるイエスさまが、再びこの世に来られる日を待っています。

イエスさまが再びこの世に到来される日。それは、この世の終わりの日であり、すべての者の審きの日であり、わたしたちの救いの完成の日です。

この日が来ることは、聖書に確かな約束として、語られています。

世のすべての教会は、今この時も、イエスさまが再び来られる、その日を待ち望みながら、日々を歩んでいるのです。

…つまり、わたしたちは、約 2000 年前に起こった、イエスさまが世に到来なさった出来事を覚えるアドベントと。将来、イエスさまが再び来てくださる日を待ち望むアドベント。この二つのアドベントの間を、歩んでいるということになります。

今日は、この二つのアドベントを、ご一緒に覚えて、クリスマスに向けての備えとしたいと思うのです。

### <最初のアドベント>

さて、最初のアドベント。一つ目の、イエスさまの到来。それは、イエスさまのご降誕の出来事です。これは、神さまが、わたしたち人間を罪から救い出すための、大きなご計画が、この地上で、このわたしたちが生きる歴史の中で、確かに実現した、具体的な出来事でした。

神さまは、神の御子イエスさまが、この世にお生まれになるずっと前から、旧約聖書の時代から、この救いのご計画を、ご自分の民に示して来られました。

そして、その民の王さまであったダビデに、ダビデの子孫から、すべての人を罪から救い出すメシア、救い主を生まれさせる、ということ約束しておられたのです。

それはまさに、今日のイザヤ書にも示されています。55：3 にはこうありました。「耳を傾けて聞き、わたしのもとに来るがよい。聞き従って、魂に命を得よ。わたしはあなたたちとどこしえの契約を結ぶ。ダビデに約束した真実の慈しみのゆえに。」

神さまはダビデを通して、この契約を実現すると示されました。

また、ここに出てきた「どこしえの契約」とは、ダビデの子孫から生まれる救い主によって、すべての者を罪から救い出す、という契約です。

この前のイザヤ 55：1 には「渴きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。銀を持たない者も来るがよい。穀物を求めて、食べよ。来て、銀を払うことなく穀物を求め／価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ」とありました。

罪に捕らわれ、神を、隣人を愛することができず、渴き、枯れ果て、飢えている者を、そのような人間を、そのようなわたしたちを、神さまは憐れんでくださいました。

そして、神さまは、わたしの声に聞き従うなら。わたしのもとに来るなら。値なしに、あなたを、溢れるほどの恵みで満たそう。魂に命を得させよう。

そう言って、契約を結んでくださったのです。

そして、まさに、この神さまの救いの契約を実現するために、神の御子イエスさまが、ダビデの子孫として、この世にお生まれになったのです。今日のヨハネの黙示録の 22：16 は、イエスさまご自身の言葉として語られていますが、こうありました。

「わたし、イエスは使いを遣わし、諸教会のために以上のことをあなたがたに証しした。わたしは、ダビデのひこばえ、その一族、輝く明けの明星である。」

イエスさまご自身が、わたしは、ダビデのひこばえ、その一族である、と証ししておられます。わたしこそが、ダビデから出た子孫であり、父なる神さまが、ダビデに約束なさったことの実現だ。わたしこそが、約束された救い主、メシアだ。そう宣言なさるのです。

そして、わたしは、「輝く明けの明星である」と言われます。明けの明星とは、真っ暗闇の世が明けることを知らせる、先駆けの光です。罪の暗闇の中に、この方が、光を灯す。この方が、罪の闇の中にいるわたしたちの、救いの光となってくださるのです。

しかも、この救いは、「値を払うことなく」与えられます。イザヤ書 55：1 にはこうありました。「渴きを覚えている者は皆、水のところに来るがよい。銀を持たない者も来るがよい。穀物を求めて、食べよ。来て、銀を払うことなく穀物を求め／価を払うことなく、ぶどう酒と乳を得よ。」まさに、この預言を実現し、わたしたちに、値なしに救いを与えるためにこそ、イエスさまはこの世に来て下さったのです。

「来るがよい」。「来るがよい」。

わたしたちは、この救い主であるイエスさまの御許へ行くならば、この方の招きの声に聞き従うなら、「値を払うことなく」、渴きを癒され、飢えを満たされます。

命をいただくために、救いをいただくために、値を何も払わなくてよいのです。

いや、厳密に言うなら、わたしたちは、払うことができるものを、何も持っていなかったのです。救いを得るために、罪を赦していただくために、神さまの御許に近づくために、差し出せるようなものは何一つ持っていなかった。むしろ、自分でも、もはやどうすることも出来ない、罪の負債ばかりを抱えていたほどでした。

でも、神さまは、すべてを与えてくださいます。なぜなら、神さまは、お造りになったわたしたち一人一人を、深く愛して下さり、憐れんで下さり、慈しんでくださるからです。

そして、わたしたちが、値を払うことなく、すべての恵みを受けるため。わたしの代わりに、すべての代価を支払うために来て下さった方こそ、神の御子イエスさまだったのです。

つまり、わたしたちに与えられたもっとも大きなものは、この神の御子イエスさまご自身だったのです。

すべての代価は、イエスさまが、ご自分の十字架の死によって、ご自分の命によって、すべて支払ってくださいました。だから「値なしに飲むがよい」と言ってくださるのです。

ですからそれは、簡単に、差し出されたわけではありません。

イエスさまが「値なしに飲むがよい」と言ってくださる時、それは、わたしたちが、その値を支払うためのものを何も持たず、しかも、多大な負債まで抱えている。その肩代わりを、すべてイエスさまがしてくださったということなのです。

わたしたちの代わりに値を払うとは、イエスさまが、わたしの代わりに罪の審きを受け、その罪を償い、十字架に架かって死ぬということだったのです。

このイエスさまの罪の償いのゆえに、わたしたちは、ただ、来て、受けるだけで良い、と言われるのです。

ヨハネ黙示録にもまた、こうありました。「渴いている者は来るがよい。命の水が欲しい者は、価なしに飲むがよい。」

わたしたちは、ただ、この招きに応じて、救い主イエスさまの御許に行くだけなのです。与えられた命の水を、感謝して受け取るだけなのです。

…神の御子イエスさまが、この世に来て下さったのは、まさにこのようにして、わたしたちの罪をすべて背負って償うためでした。わたしたちに命を得させるために、ご自分が十字架に架かって死ぬためでした。

クリスマスとは、そのような出来事を覚える日なのです。

ですからクリスマスは、ただイエスさまのお誕生日をお祝いする日なのではありません。そうして、神の御子が、世に来て下さり、十字架に架かって死んで下さらなければ、飢え、渴き、滅んでいくしかなかった、自分の罪の深刻さを覚える日なのです。

しかしまた、それ以上に、クリスマスは、そんなわたしを救い出すために、神さまが、大切な御子イエスさまを、この世に遣わして下さったこと。その御子を十字架に架けてでも、このわたしの罪を赦し、生かしてくださるほどに、神さまがわたしを愛して下さっている、ということ、現わして下さった日なのです。

だから、わたしたちはアドベントの間、悔い改めと、感謝をもって日々を過ごし、クリスマスには、そうしてわたしの救いのために来て下さったイエスさまを、また、その恵みを、神さまの愛を、心から深く受け入れ、神さまを賛美したいのです。

#### <将来の到来を待つアドベント>

そのようにして、イエスさまの命の水に生かされて、今、地上の日々を歩んでいるわたしたちです。

そして、この歩みには、やがて終わりの日がきます。第二のアドベントです。

それは、救いの御業を成し遂げ、復活し、今は天の父なる神さまと共におられるイエスさまが、再び、この世に来られる日のことです。

終りの日は、いつ来るかは分かりません。もしかすると、今日の午後に、イエスさまは再び来られるかも知れません。でも、もしかすると、500年後に来られるのかも知れません。

その時、わたしたちは、どこにいるのか、分かりません。まだ生きて、地上の歩みを続けているかも知れませんし、それぞれ、もう天に召されているかも知れません。

でも、大切なのは、イエスさまが再び来られる日は、救いの完成の日として、恵みが満ち溢れる喜びの日として、わたしたちが心から待ち望むべき日である、ということです。

イエスさまは、再び来られて、何をなさるのか。

それは、以前に『ハイデルベルク信仰問答』でも学んできましたが、使徒信条で「かしこより来りて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん」と言われているように、イエスさまは、わたしたちに最後の審判をなされるために、再び来られるのです。

審きの日。それは、恐ろしい日なのでしょう。自分の、罪にまみれた歩み、人を愛せない思い、人を赦せない現状を思えば、それは、恐ろしい日に違いありません。

でも、『ハイデルベルク信仰問答』は、イエスさまの再臨と審きの日を、わたしたちの「慰め」として語っていました。

どうして慰めなのか。それは、わたしを審くお方は、わたしの罪を代わりに背負って、十字架に架かって死んで下さった、イエスさまご自身だからです。

終りの日、わたしたちは神さまの御前に立たされて、すべての罪を明らかにされるでしょう。しかし、そこには、わたしの救い主であるイエスさまが立っていてくださり、こう宣言して下さるのです。「この者の罪は、すべて、わたしが背負った。この者の罪は、すべて、わたしが償い終えた。だから、この者は、神の御前で無罪だ」と。「義である」と。

最後の審判。それは、わたしが今、信じている、罪の赦しと、永遠の命と、復活の約束が、まことに真実であることが、完全に明らかにされる日なのです。すべての救いが、完成する日なのです。そして、天も、地も、造られたものすべてが、新しくされる日なのです。

今はまだ、それらは隠されています。わたしの罪が赦されていることは、誰の目から見ても明らかではありません。神さまが共にいてくださることを、わたしは確信していますが、目に見えないので、それを信じない人もいるでしょう。復活は確かな約束で、終わりの日に起こることですが、イエスさまの他には、まだ誰もそれを経験していませんから、そのことを、疑う人も、信じない人もいます。

確かに、イエスさまはこの地上に降られ、救いの御業は実現し、聖書の御言葉を通して明らかにされています。明けの明星は、確かに輝いています。でもそれは、まだすべての者の目には映っていないし、明らかにされていないのです。

だから、神さまの光が真昼のようにすべてを照らす、その日を。救いがすべての者の目に明らかにされるその日を。わたしたちは、待たなければなりません。

そして、それまでの間に、まだ俯いて暗闇を見つめている人々に、明けの明星を指し示さなければなりません。もう光は輝き始めていると。救いは実現していると。あなたも、その光を見ることが出来る。あなたも、値なしに、命の水を飲むようにと招かれている、と。

そして時には、そのように、イエスさまを知らされ、光を指し示す存在とされているわたしたちもまた、救いの現実に生かされていながら。イエスさまが共にいてくださると知っていながら。苦しみや困難に遭うと、神さまの恵みを疑ったり、迷いを覚えたり、不安になったりすることがあるのです。

でも、わたしたちは、目の前に起こる悲惨な罪の現実が、わたしたちを支配しているのではなく、罪にも、死にも勝利されたイエスさまが、わたしを支配してくださっている。それこそが、真実であり、現実であると信じて、歩むようにと導かれているのです。

そのためにこそ、わたしたちは礼拝をささげます。神さまの御言葉を聞き続けます。聖餐の食卓に与り続けます。

そうして、神さまによって、救いの事実を確かにされ、信仰を励まされ、何とか足を踏ん張らされて、前に進んでいくことができるのです。

聖餐の食卓は、目に見えない恵みを、目に見えるかたちで、わたしたちが確かに受け取るために、イエスさまが定めてくださったものです。

そして、これは、やがて来る天の食卓の先取りです。わたしたちは、イエスさまの食卓に、確かに自分の席が用意されており、すべての兄弟姉妹と共に、喜びの祝宴にあずかる、その終わりの日の恵みを、ここで既に味わわせていただいているのです。

そうして、神さまは、御言葉を通して、聖礼典を通して、わたしたちがこの世にあって、イエスさまの救いを信じ、神さまに信頼し、聖霊に導かれて、終わりの日への希望をもって歩むようにと、励ましてくださっているのです。

そうして、終わりの日、救いの完成の日を待ち望んで生きることは、わたしたちが、日々の苦しみや困難の先にあるものを見つめて、希望をもって生きていく力になります。

生きている限り、苦しみも、悩みも、不安も、哀しみも、無くなることはないでしょう。死ぬことも、わたしたちは皆、避けることはできません。でも、どのような時にも、絶望することは、決してありません。なぜなら、わたしのすべての歩みに、天におられるイエスさまが、伴ってくださるからです。

やがて最後には、すべてに勝利されたイエスさまご自身が来られます。そして、この方が、罪も、悪も、苦しみも、病も、死も、すべてを滅ぼし、すべてを新しくし、わたしたちを、心も、体も、魂も、思いも、まるごと、救いの御手で抱き取ってくださるのです。

ですから、イエスさまが再び来られる日は、わたしたちの希望であり、心から待ち望むべき日なのです。

だから、わたしたちは、祈ります。「主イエスよ、来てください」。

ヨハネ黙示録の 22：17 にはこうありました。「霊と花嫁とが言う。『来てください。』これを聞く者も言うがよい。『来てください』と。」

霊と花嫁とは、聖霊に満たされた教会のことです。救われ、霊を注がれ、イエスさまに結ばれた、わたしたちのことです。

わたしたちは、イエスさまを待ち望んで祈ります。「来てください」。

アドベントの時、わたしたちは、このイエスさまの再び来られる日への希望を、さらに新たに、確かにされたいと願うのです。

この後、聖餐の時に歌う讃美歌 81 に「マラナ・タ」という言葉が出て来ます。

これはアラム語で「主よ、来て下さい」という意味です。この祈りを、教会は 2000 年の間ずっと祈り続けてきました。アーメン、ハレルヤ、そして、マラナ・タ、と、教会に連なって歩んできたすべての聖徒たちが、すべての兄弟姉妹が、常に口にしてきた祈りの言葉の一つです。

わたしたちも、このアドベントの時、この神さまの救いに生かされている群れの一員として、心からの希望と共に、イエスさま、「マラナ・タ」。主イエスよ、「来て下さい」。そう祈り続けていきたいのです。

### 【お祈り】

天の父なる神さま

教会は、アドベントの時を迎えました。わたしたちの罪を背負って、贖ってくださるために。値なしに、わたしたちを命に与らせるために。イエスさまがこの世に来てくださいました。クリスマスまでの日々、その驚くべき恵みの出来事と、そのご計画を実現してくださる、神さまの深い愛を、心に深く刻んで、悔い改めと、感謝をもって、歩ませて下さい。

また、わたしたちは、第二の到来、イエスさまが再び来てくださる日を、救いの完成の日を、心から待ち望みます。罪の闇に覆われているような世の中ですけれども、わたしたちは、確かな救いの光を見つめる者とされています。

どうか、あなたの御言葉によって、聖霊の御力によって、信仰を強められつつ、わたしたちが救いの恵みを、救いの光を、人々に指し示していくことが出来ますように。

そして、一人でも多くの者が、イエスさまの「来るがよい」との招きに応えて、イエスさまの救いの御許へ行き、罪の赦しを、まことの命を、確かな救いの約束を、いただき、渴きを癒され、飢えを満たされることが出来ますように。

そして、わたしたちを、ただイエスさまにこそ、最後の、最高の、最大の希望を置いて、「来て下さい」と、目を覚まして、祈り続ける者とならせてください。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 236 「見張りの人よ」

【信仰告白】 ニカイア信条

【聖餐】【讃美歌】 81 「主の食卓を囲み」

【十戒】【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】【祈祷】

【讃美歌】 26 「グローリア、グローリア、グローリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン